

自由応募分科会 4「北東アジアの海と島を考える: 稚内・サハリン、対馬・韓国、与那国・台湾」
報告1

花松泰倫(九州大学講師)

「対馬・釜山ボーダーツーリズムの展開と境域社会の変容」

Development of Tsushima-Busan Border Tourism and its impact on the borderland
society in Tsushima

韓国・釜山からわずか49.5kmに位置する国境の島・対馬は、古代から日本列島と大陸をつなぐ人と文化の「交流の最前線」として役割を担ってきた。その役割は現在でも脈々と受け継がれ、かつて対馬藩が主導したとされる交流の象徴であった朝鮮通信使はユネスコ世界記憶遺産への日韓共同申請が達成され、また近年では年間20万人を超える韓国人観光客がボーダーツーリズムとして対馬を訪れるようになった。さらには、日本人が対馬を経由して釜山に渡る国境観光の取り組みも行われるようになってきた。

国境離島ゆえに人口現象と少子高齢化が急速に進む現状の中で、島の未来と持続可能性を対岸の韓国との関係や付き合いのなかに見出し、「どん詰まり」からの脱却を狙う動きが存在している。客人として迎え入れるようになって15年あまり。島経済への好影響がようやく実感できるようになり、個人レベルでの日韓交流も盛んとなって、物理的な国境の敷居は低くなってきたように見える(脱境界化)。しかし他方で、「韓国人お断り」といった反韓感情も根強く、むしろ接触の機会が多くなればなるほど、対馬島民の韓国人観光客に対する心理的ボーダーは高くなっているようにも見える(再境界化)。ただいずれにせよ、「外国人」というより「隣人」としての意識の高まりがその背景にあるのは間違いない。

境域における海を隔てた隣国との付き合いは、国家間、国民間の関係に必ずしも収斂せず、境域独自のロジックにより変化する。脱境界化と再境界化が同時並行で進行し、それらが境域社会内部でのダイナミックな変化を引き起こす。日韓双方からのボーダーツーリズムの展開は今後も続き、島内境域社会の様態も大きな変化を見るであろう。本報告は、対馬と釜山の間で生じる人の動き、交流、軋轢、心理的壁の変容過程を整理することで、新たな北東アジア地域像を考える手掛かりを得ることを目的とする。